Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2004, Vol. 51, 63 − 76.

否定的対人感情研究の諸相

高　木　邦　子[1)]

人は誰でも自分を取り巻く人間の中に，好ましい人物や苦手な人，尊敬する人や恐れている人などがいる。こうした特定の人物に対する持続的感情は，対人感情（interpersonal affect）と呼ばれ，対人関係研究で広く扱われているテーマである。対人感情は一般に，親密さや好意といった肯定的対人感情（Positive Interpersonal Affect: PIA）と，嫌悪に代表される否定的対人感情（Negative Interpersonal Affect: NIA）に二分されるが，このうちNIA対象者の行動は，たとえ直接的な害を及ぼさない親和的行動であっても悪意的解釈がなされやすく（齋藤，1990），頻繁に怒りなどの不快情動を喚起することが指摘されている（Averill, 1983；齋藤，1986）。このように，NIA対象者の存在は否定的な認知的処理をはじめとする否定的反応・行動を一貫して導くことから，NIAは関係の悪化，攻撃行動，ストレスなど対人関係のネガティブな側面との関与が予想される。

だが，これまで対人関係の研究領域においては，こうした対人関係の否定的側面は好意や親密化といった肯定的側面の裏側として扱われることはあっても，否定的側面そのものへの注目はほとんどなかった。これは，距離を置いたり，回避したりすることで解消され得るNIA対象者との関係よりも，いかに相手に近づき，親しくなるかというPIA対象者との関係に大きな関心が払われたことによると考えられる。

しかしながら，NIA対象者との関係においては必ずしも相互作用を避けられるわけでははないこと（日向野・小口，2002；金山，2003）や，こうした人物との関係は“絶ってしまえばそれで終わり”ではなく，様々なかたちで「修復」される必要がある（増田，2001）との立場から，近年，NIAへの関心が高まってきている（日向野・堀毛・小口，1999；日向野・小口，2002；金山，2003など）。そして，対人関係の否定的側面への注目と概念整理，数量的な実態把握，生起・解消の心理的過程解明の必要性が指摘されている（日向野・小口，2002）。

現時点ではNIAに関する研究やそこから得られた知見は非常に少ないが，否定的対人感情研究は，今後の発展が期待される領域であると考えられる。そこで本論では，社会心理学において広く得られる対人関係研究から対人感情に関連する知見を整理し，さらにNIA研究の位置づけを示して今後の研究課題の顕在化を試みる。

対人感情研究の視点

周辺概念との関係

対人感情の周辺領域としては，態度（attitude），対人魅力（interpersonal attraction）や，印象形成（impression formation），対人認知（person perception）などが挙げられる。対人感情に関する知見はこれらの研究領域から広く得られるものであると考えられる。以下にそれぞれの概念と対人感情の関係性を述べた知見をレビューする。

態度　Allport（1954）が対人感情を“態度の中で対象が特定的で，永続的かつ構造的，意識的，そして病的なものは含まないもの”と定義しているように，対人感情は古くから対人的態度に内包されるものと考えられてきた。また，態度はRosenberg & Hovland（1960）やMcGuire（1969）により，「認知的成分（以下「認知」とする）」，「感情的成分（「感情」）」，「行動的成分（「行動」）」の3成分に分類されているが，この態度の3成分モデル（three component model of attitude）（Rosenberg & Hovland, 1960）にならい，対人感情を対人的態度の「感情的成分」と見なす立場は一般的である（Krech, Crutehfield, & Ballachey, 1962；Triandes, 1967など）。

態度の3成分モデルにおいては，「認知」，「感情」，「行動」の三つの成分は相互に連動した一貫した関係にあると考えられており（Rosenberg & ovland, 1960），中でも「感情」と「認知」は密接な関係があることが指摘されている（林，1996；八木・新延，1989など）。こうしたことから，これらの成分が結局は上位概念である態度としてまとめて扱われることはしばしばある。また，

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

両者の関連の強さや，弁別の曖昧さ，困難さもしばしば指摘される。態度と対象との連合を重視するあまり，認知的・感情的といった態度の性質を敢えて考えないで態度を包括的にとらえる立場もある（Fazio, 1989）。

その一方で，中村和彦（1996）は，近年では「認知」成分に相当する対人認知と，「感情」成分に相当する対人感情を弁別して検討を試みる流れが生じてきていると述べている。その根拠としては，態度を説明するのに「認知」と「感情」を個別の2要因としたモデルの方が両者をまとめて1要因とした場合よりも適合度が高いという数量的検討の結果（Bagozzi & Burnkrant, 1979）や，「感情」と「認知」の関連が，関係の進展段階により異なるという性質の違いを示唆する知見（大橋・平林・小川・鹿内・林・吉田・津村，1978）などが挙げられる。Breckler & Wiggins（1989；1991）もまた，「感情」と「認知」の理論的・実証的区分を試みている。Breckler & Wigginsは，「感情」を対象について主観的に既述された質問への評価によるSD法（ex：その人物によって（自分は）…良い気分になる／悪い気分になる）により，「認知」を同じ質問について客観的に既述されたSD法（ex：その人物は（一般的に）…良い人である／悪い人である）によりそれぞれ測定した。これを受けて八木・新延（1989）は，対人感情を「相手について考えたときに被験者が経験する情動」と，対人評価を「相手についての容姿や特性をはじめとする客観的視点を伴った評価」と定義している。

対人魅力　Rubin（1970）によると，対人魅力は“他者に対してある仕方で「考え」「感じ」「行動しよう」とする先有傾向を含んだ，ある人によって保持されている態度”と定義されている。またHuston（1974）による対人魅力の定義は“ある人のほかの人に対する心情，他の人に関する信念，他の人への接近－回避の行動傾向を含む多面的態度”である。このように，対人魅力を対人的態度として定義する点において，多くの研究者は一致している（Duck, 1977）。特に，対人魅力を態度の感情成分，すなわち対人感情とほぼ同義に見なしている研究は多い（Baron & Byrne, 1984；林，1996など）。

印象形成　印象形成研究と対人感情研究との関連については，明確な区別がなされているわけではない。その理由は，印象形成と態度形成が，現実の心理的働きとしては区別がつかないため弁別ができない（中村陽吉，1983）と説明されたり，対人魅力と印象形成が同様の心理的機構により説明可能であるため，区別する必要が無い（奥田，2000）と説明されたりしている。いずれにせよ，両者は弁別の一般的基準も，弁別の必要性も指摘されてはいないのが現状である。ただし，印象形成研究は文字どおり印象の「形成」段階の過程や影響要因を示すことが根幹にあることから，対人感情の形成過程とその影響要因に関する研究に有用な知見を含んでいるといえよう。

対人認知　対人認知研究は，対人感情や対人魅力，その上位概念である態度，近接領域の印象形成までも含む包括的な研究領域と考えられる。たとえばSchneider（1969）は対人認知過程として，注目，速写判断（第一印象），相手の行動帰属，人格特性の推論，印象形成，将来の行動予測，を挙げたが，この過程の多くは対人感情，対人魅力，態度，印象形成研究で挙げられてきた要因と重複している。また，林（1978）による対人認知の基本次元に含まれる「個人的親しみやすさ」は対人魅力や対人感情と同義に見なすことができ，山本（1986）がまとめた対人認知カテゴリーにも，相手の外見や背景要因などの客観的情報や社会的相互作用など，近接領域で挙げられてきた影響要因に相当すると考えられる要因が含まれている。

現実の対人関係への適用可能性

以上から，対人感情に関する知見が，対人的態度，対人魅力，印象形成，対人認知といった研究領域におけるアプローチから広く概観されることが示されている。

ただし，これらの領域の先行研究で得られた知見の多くは，主に実験室状況で得られたものである。そのため，これらの知見を現実の対人関係に適用することに疑問を呈する立場がある（Aron, Dutton, Aron, & Iverson, 1989；Huston & Levinger, 1978）。だがその一方で，魅力の規定因が現実の対人関係に対しても充分に説明力を持つという逆の知見（中村雅彦，1991）もあり，これらを受けて中村（1996）は，現実に展開されている対人関係を対象とした影響要因と重みづけに関する検討の必要性を述べている。

対人感情の分類

対人感情の二分法

対人感情を研究対象として扱うために，対人感情はしばしば幾つかに分類されてきた。たとえば，古くはMcDougall（1908）による「愛情」と「憎悪」，肯定的自尊感情である「優越」と否定的自尊感情である「劣位」という分類がある。これらは後にFreedman, Leary, Ossorio & Coffey（1951）やFoa（1961）により提案された対人行動を決定する2軸（「愛情－憎悪」，「支配－服従」）の基礎となっている。これは，津村・大坊・林・今川（1984）により示された対人感情の次元である「受容－拒否／親和－敵対」と「支配－服従／保護－

依存」の次元にも相当すると考えられる。

しかし，その後「優越－劣位」あるいは「支配－服従」といった勢力関係に関する2本目の軸への関心は薄れ，「愛情－憎悪（または「親和－敵対」）」という軸のみが重視されるようになってきた。そして近年では，対人感情は嫌悪に集約される否定的対人感情（Negative Interpersonal Affect: NIA）と，好意に集約される肯定的対人感情（Positive Interpersonal Affect: PIA）とに二分され，相互に対極に位置するものとして扱われることが多い（青木，1994；Breckler & Wiggins, 1989など）。対人感情の近接概念である対人魅力も同様に，「否定的 - 肯定的の次元に沿った他者に対する評価」と定義されている（Baron & Byrne, 1984）。このように対人感情が好悪に集約する理由として岩下（1969）は，(1) 否定的もしくは肯定的行動の規定因として対人行動規制に重要な位置を占めること，(2) 対人感情は，体験される自我によって主観的に好悪に区分されること，を挙げている。岩下の二点目の指摘にあるように，もっともシンプルな他者への感情は，否定的あるいは肯定的という対比される二側面から評価されるであろう。したがって，対人感情をNIA－PIAという一次元として扱うことは単純明快でわかりやすく，また独立変数としての操作や，得られた結果の解釈は容易になるという利点がある。

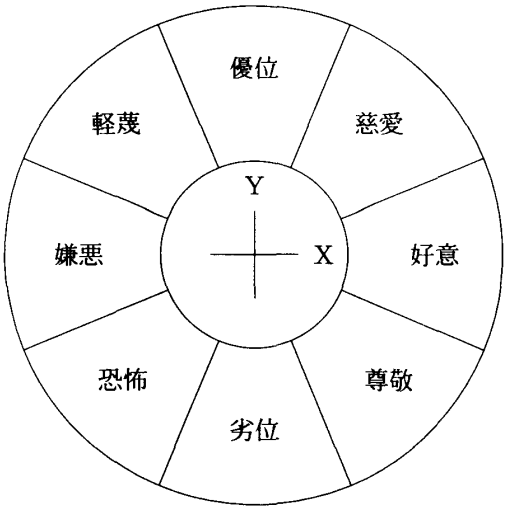
対人感情は，他者との相互作用の基礎となるものであり，ひとたび形成されると，相手の行為の知覚，評価，思考，判断，情緒の喚起，欲求生起などの認知的処理や，その結果として示される行動・反応，といった一連のやりとりに影響を与えると考えられている（Bersheid, 1985；池上，1991；齋藤，1986）。こうした対人感情の機能を示す代表的な理論に，Heider（1958）のバランス理論がある。Heiderによると，PIA対象者（O）が，何らかの対象（X）とユニット関係（所有，所属，嗜好etc.）にあるとき，人（P）はXを肯定的に評価し，逆にOがXと非ユニット関係にあるときは，PはXを否定的に評価する。逆に，OがNIA対象者である場合は，OとXのユニット関係がPのXに対する否定的評価を，非ユニット関係が肯定的評価をそれぞれ導く。そのほか，好意の程度により対人認知のしかたが異なること（弓削，1994）。好きな他者は実際以上に自分と類似しているとイメージされやすいこと（Fiedler, Warrington, & Blaisdel, 1952；梶田，1967など）など，対人感情のさまざまな認知的処理との関係が示されている。さらに，対人感情が認知的処理（帰属）に及ぼす影響については，援助行動の文脈に置いて，嫌いな人物に対する援助行動は好きな人物に対する援助行動に比べ，自分の意志ではなく外的で不安定な要因に帰属されること（竹村・高木，1987）や，嫌いな人物が行った援助行動は好きな人物が行った援助行動に比べて外的・不安定・一般的な要因に帰属されること（竹村・高木，1990）などが示されている。

対人感情と相手に対する行動や反応との関係について齋藤（1990）は，好意を感じている他者のポジティブな行為に対しては援助・受容・親和的行動といった関係を発展させようとする対応行動がとられ，ネガティブな行為に対しては関係の持続がはかられることを示している。それに対して，嫌悪を感じている他者からの行為は，相手からの行為がポジティブであろうがネガティブであろうが，できるだけ関係をもちたくないという関係中止への対応が顕著に示されることもわかっている（齋藤，1990）。また，加藤（2003）は，相手に対する愛情すなわちPIAが強いほど関係の改善や維持の努力をする方略をとりやすく，関係の放棄・崩壊や，問題解決の先送りを目指した方略を取りにくいことを示している。

このように，PIAは相手との関係を親密化や関係改善（加藤，2003）に向けた認知的処理や反応を，NIAは相手との関係の中止や回避（齋藤，1990）に向けた認知的処理や反応を，それぞれ一貫して導くようだ。ただし，現実の対人場面では認知的処理にさまざまな要因がかかわるため，対人感情が認知的処理に及ぼす影響は多様であることが予想できる。さらに，動機と反応の結びつきの個人差からもわかるように，認知的処理は等しくとも反応として生じる行動にも個人差がある。そのため，対人感情の及ぼす影響には，行動や反応レベルよりもむしろその根底にある動機や認知次元での検討が必要であると考えられる。

二分法の問題点

過度の単純化の問題　これまで述べてきたように，対人感情は一般にNIA－PIAという二分法により扱われ，それに関する多様な知見が得られてきた。だが，日常生活で経験される感情全般については，「ネガティブ－ポジティブ」と二分することに対する批判がある。Lazarus（1999）は，一般的な感情経験を「ネガティブ－ポジティブ」の次元に単純化して扱うことに疑問を呈し，その主な理由を，“単純さを求めるあまりに感情の性質の多様性を無視することになるため”と説明している。Lazarus（1999）の指摘と同様のことが対人感情についてもいえるのではないであろうか。すなわち，NIAには，たとえば嫌悪だけでなく脅威や軽蔑など，それぞれの生起に関わる原因，主観的経験，結果として示される行動などが異なるものが含まれている。それに



X：ネガティブ－ポジティブ
Y：劣性－優性

Figure 1　齋藤（1990）による対人感情分類

もかかわらずこれらの多様な否定的対人感情をNIAという単一の分類にまとめてしまうことは，個々の感情の特徴を見落とすことに繋がると考えられる。こうした立場から齋藤（1985）は対人感情のさらなる分類を試み，「軽蔑－尊敬」，「嫌悪－好意」，「恐怖－慈愛」，「劣位－優位」と相互に対極の意味を持つ4対8種類の否定的－肯定的対人感情を提案した（Figure 1)。そして，それぞれの対人感情の対象者間で，生じる反応や行動が異なることを示している（齋藤，1990)。

NIA－PIAの対称性の問題　対人感情をNIA－PIAと二分して扱う先行研究には，(1) NIAとPIAという対照的な意味を持つ独立のカテゴリーとして扱う立場と，(2) NIAとPIAを一次元の両端とした連続変量として扱う立場の二つがあるようだ（Taylor，1991)。前者の例としては，Heider（1958）や齋藤（1990)，竹村・高木（1990)，青木（1994）の研究などが挙げられる。彼らは特定の対人感情を持つ人物の想定を求めた上で，その人物に対する反応の違いを検討し，対人感情の肯定的・否定的といった質的な差異による影響の違いを記述している。

NIA－PIAという一次元の連続変量による測定は，その単純さゆえに，一見悪印象から好印象への変化といった対人関係のおおまかでダイナミックな変遷を既述するには適していると考えられるが，その反面，対人感情にかかわる詳細な影響要因や質的側面を論じるには不備な点もある。たとえば，NIA－PIAという両極尺度に評定を得ている研究であっても，実際は前提となっているNIAとPIAの対称性が十分に反映されて得られているとは言いがたいものがある。具体的は，弓削（1994）は，任意の他者に対する好意度の変遷を縦断的に得るために「0：嫌い」～「50：無関心」～「100：好き」という5点刻みの尺度を使用しているが，全ての被験者の好意度評定は50～90の範囲内にあり，結局，NIA－PIAという尺度は用いていても，得られたデータは程度の異なるPIA対象者についての回答であった。

対人感情や対人魅力の程度を研究の目的に応じて「親密さ」「好ましさ」，あるいは「嫌悪」「劣等感」などを単極とした尺度で得ている研究は非常に多い（大迫・高橋，1994：飛田，1989など)。NIAとPIAが概念上一次元上で示されるものならば，こうした単極尺度で得られた知見も，たとえば単極尺度で好ましさ得点が低い場合「好ましさが低い」ことを「嫌悪が高い」と読み替えることは可能と考えることができるであろう。だが，Zevon & Tellegen（1982）では，普遍的な感情の記述の因子分析からポジティブ－ネガティブの2因子が得られている。この結果を受けてZevon & Tellegenは，感情研究におけるポジティブ－ネガティブという対称性の前提を批判し，ポジティブ感情とネガティブ感情は，記述的には両極であるが，情緒の意味としては単極次元であると述べている。さらに，日常的な情緒（mood）を測定する尺度として有名なPANAS（Positive and Negative Affect Schedule）を提案したWatsonら（Watson，Clark & Tellegen，1988；Watson & Tellegen，1985）もまた，PA（Positive Affect）とNA（Negative Affect）を互いに対極のものと見なすそれまでの視点を批判し，PAとNAをそれぞれPANASにおける個別の下位尺度として作成している。対人感情においても「好意」の対極は一般に「嫌悪」と考えられることが多いが，これらの知見を受けると，概念上あるいは測定上は，「好意」の対極には「好きじゃない（好意を感じない)」や「何とも思わない（無関心)」などを想定することも可能である。

対人感情の対称性についてのこの疑問は，単純化を避けるために対人感情の下位尺度を分類することによりさらに顕著な問題となるとも考えられる。Figure 1に示した齋藤による分類は，やはり特定の肯定的対人感情の対極に，かならず対応する特定の対人感情があるかのように考えられている。だが，この分類はNIAあるいはPIAの多様性に注目した点では評価できるが，その対称性については実証的な根拠が無い。事実，齋藤（1990）自身，対人感情を4つの連続変量としてではなく8つのカテゴリーとして用いており，構造の対称性を裏づける知見は示されていないのである。また，齋藤により提案された対人感情の分類は，理論にもとづいてトップダウン的に構成されたものでもあることから，この分

類を裏づける実証的根拠にも欠けている。そのため，現実の対人感情からのボトムアップ的な検討によりこの分類の妥当性を確認する必要がある。

対人感情の形成過程

対人感情の規定因

対人感情やその周辺領域の研究により挙げられた対人感情の規定因は，幾つかの視点から分類が試みられてきた。中村雅彦（1996）は，対人魅力の規定因を，魅力を形成する相手の要因のみに注目し，相手の外見などの「表面的規定条件」と相互作用などにより推測された性格特性などの「内面的規定条件」に分類している。それに対して日向野・小口（2002）は対人苦手意識の形成要因を，形成する当人の「外的要因」と「内的要因」に分類している。日向野らの「内的要因」には対人苦手意識を覚える当人の心理・認知過程やスキルの問題が含まれており，「外的要因」には，相手の態度や言動など，中村の分類した「表面的規定条件」と「内面的既定条件」が含まれる。このように，対人感情の形成には，対人感情対象者の要因である「相手の表面的要因」と「相手の内面的要因」，そして対象者以外の要因として「自分自身の要因」と「自分以外の要因」，というように，複数の視点に立った要因がかかわると考えられる。遠矢（1996）による親密化要因の分類は，こうした多面的な視点にもとづいたものである。遠矢は要因の所在が自己・相手・双方のどこにあるかに注目して，友人関係の親密化要因を「物理的要因」，「相手側の要因」，「相互的要因」，「自己要因」に分類した。以下ではこの遠矢の分類に沿って先行研究から得られた対人感情の規定因をまとめる[2)]。ただし，ここで挙げる規定因はいずれも，前述したNIA－PIAという二分法の問題は考慮していないが，対人感情をさらに分類したならば，これらの要因の影響が異なる可能性があることは注意すべきである。

(1) 物理的要因　Griffit（1966）は，高温多湿で不快な環境で出会った他者に比べて，快適な環境で出会った他者に対して好意的評価が生じやすいことを示している。このように，状況の物理的要因により喚起された快／不快の情動が対人感情の決定に影響することや，肯定的あるいは否定的認知を促進することはしばしば指摘されている（Forgas, 1991; Forgas & Bower, 1987; Ikegami, 1993など）。また，こうした環境要因以外にも，相手との関係が当初から上下関係や敵対あるいは仲間関係にある場合のように，不快または快情動を喚起しやすいような関係性の要因も，対人感情形成に何らかの影響を及ぼすと考えられる。

相手との物理的な距離，すなわち空間的近接性が好意を高めることも知られている（Festinger, Schachter, & Back, 1950；大橋・鹿内・吉田・林・津村・平林・坂西・廣岡・中村, 1982）。この理由はしばしば単純接触効果（Bornstein & D'Agostino, 1992）から説明されるが，初対面時の印象が悪い場合に限り，単純接触はNIAを高めるように作用するという知見もある（Brickman, Redfield, Harrison, & Crandall, 1972）。したがって，対人感情の形成要因を単純な物理的要因のみから説明することは難しい。むしろ物理的要因は，後に挙げるような様々な要因と密接に関連して影響していると考えるのが妥当である。

(2) 相手側の要因　対人感情の形成要因として相手側の要因を挙げている研究は非常に多い。たとえば，相手の外見的魅力の高さ（Berscheid & Walster, 1974など）や，話し方の好ましさ（大坪・吉田，1990），社会的に望ましい属性（Aronson, Willerman, & Floyd, 1966）といった客観的情報，相手から向けられた好意（Curtis & Miller, 1986），相手からの自己開示（中村，1985）といった相手の行動が好意に代表されるPIAの形成に影響することが示されている。これらの要因は評価者に快適な情動を喚起することが予想されるため，喚起された情動と相手への印象が連合され，好ましい対人感情が形成されると考えられる。

NIAについては，金山（2002）が，嫌悪の原因を分析し，相手のマナーの欠如や，不愉快な言動，尊大な言動，横暴な言動などの相手の行動が嫌悪の形成に影響することを示している。また，対人苦手意識の対象者の特徴をKJ法により分類した日向野・堀毛・小口（1998）では，人の迷惑を考えないなどの「自己中心性」や，場をわきまえない，しつこいなどの「うっとおしさ」が報告されている。これらの特徴も，相手の行動特性から推測された要因と考えられることから，相手側の要因により喚起された不快情動が相手の印象と連合してNIAが形成されると解釈できる。

(3) 相互の要因　対人関係の進展過程として，接触のない段階（no contact）から(a)相互作用が無く一方が他方に気づく段階，(b)社会的役割に支配されたり，その場限りのやりとりが行われたりする表面的接触段階，(c)ある程度個人的な反応を相互に交わす相互作用段階，という3段階を提案したLevingerは，(b)の表面的接触段階までの魅力の形成要因を扱った研究は多いが，相互

2）それぞれの対人魅力規定因が，強化理論，認知理論，社会的比較理論などにより分類されることもあるが，本論では言及しない。これらの理論的背景に着目したレビューは中村雅彦（1996）を参照のこと。

作用段階のように長期的な相互関係における魅力の形成や変容を扱った研究が少ないことを指摘している(Levinger, 1974)。この指摘のとおり，対人感情の形成過程に注目した研究の多くは相手の表面的接触段階までに得られる，相手の外見的魅力や性格特性などの要因に焦点をあてており，相互作用段階への注目は少ない。だが現実の対人関係について考えると，我々は他者に関する情報を一方的に受け取るだけではなく，何気ない雑談をしたり，ちょっとした挨拶を交わしたりといった，些細だがさまざまな対人的相互作用を経て対人関係を構築している（廣岡, 1989；浦, 1990)。したがって，現実に相手と交わした相互作用の質や量は，対人感情の形成について考慮すべき重要な点であると考えられる。

その他，相手と自分の意見や態度の類似の程度や類似点の数は，好意と関連することが示されている（Byrne, Baskett, & Hodges, 1971）が，こうした類似性も相互の要因と見なされる。だが，自分の否定的側面における類似性はかえって不快情動が喚起されるため，相手に対する嫌悪感情を抱くという指摘（梶田, 1988）や，類似点の重要性評価により対人感情形成への影響が異なるという指摘（奥田, 1993；Rosenbaum, 1986)，さらに，関係が進展すると類似性よりも相補性が好意と関連するという知見（Bigelow & La Gaipa, 1980）に示されるように，類似性や相補性は個人によるその側面の評価（自己要因）や，相手との関係性（物理的要因）などが深く関わると考えられる。

(4) 自己要因 Berger (1993) は，対人感情の形成における，当人の動機づけや意識などの個人的要因の重要性を指摘しているが，こうした自己要因へ注目した研究は，近年少しずつ見られるようになってきている。たとえば渡部 (1999) は，個人の対人行動や対人的態度を方向づける要因として個人差を重視し，社会的スキルや対人的コンピテンスといった個人特性が「賞賛」や「非拒否」といった対人欲求に影響し，対人欲求が対人態度を規定することを示唆している。また，日向野・小口 (2002) も，対人苦手意識の形成には相手の態度や言動（外的要因）だけでなく，対人苦手意識を覚える当人の心理・認知過程やスキル（内的要因）もかかわるとの立場から，セルフモニタリング能力が対人苦手意識の形成に影響することを示している。そのほか，他者と関係を築きたいという関係形成への動機づけ（山中, 1994）や，特定の他者との関係へ動機づけである対人的動機（高木, 2000）が，それぞれ親密化や対人感情の変化と関連することが示されている。これらの個人特性や対人関係への動機づけ，相手への働きかけやスキルといった個人の側面もまた，初対面の人物との関係形成に重要な役割を担うものである。しかしながら，山中 (1994) が関係形成の動機づけを入学直後という物理的要因に起因するものと見なしているように，自己要因もやはり他の要因と独立したものではないと考えられる。

要因間の関係 以上，対人感情形成に影響を及ぼすと考えられる要因を紹介したが，これらの要因は相互に関連しており，対人感情形成に間接的に影響を及ぼすこともあると考えられる。特に，物理的要因や相手側の要因についての知見は多いが，相互の要因や自己要因の影響の検討と，これらの要因間相互の関係についても検討の余地がある。たとえば相手との勢力関係，関係からの離脱の容易さ，関係の重要性，などの関係性は物理的要因と考えられるが，他方では性格特性や社会的スキルなどの個人要因も関わるように思われる。いずれかの要因が単体で対人感情を形成するのではなく，複数の要因が間接的に作用して対人感情の形成に影響するとの立場からの検討が妥当であろう。

対人感情形成に要する時間

一度形成された他者への印象や評価は，容易には変えられないことが指摘されている（Berg, 1984；中村雅彦, 1987)。そして対人感情はその定義からも，ひとたび形成されれば比較的安定したものと考えられる。では，対人感情が「ひとたび形成」されるのは，関係開始からどの程度の時間が経過した頃なのであろうか。

対人関係の形成過程を時間軸に沿って説明する立場としては，「関係の段階的分化説」と，「関係の初期分化説 (early differentiation of relatedness)」という二つの考え方がある。「関係の段階的分化説」とは，Altman & Taylor (1973) の社会的浸透理論 (social penetration theory) に代表されるように，最初の表面的関係から，自己開示などの相互作用が増加することにより親密化が漸近的に進展するという説である。Altman & Taylor により，相互作用の内容も関係の進展にしたがって変化することが示されている。一方，「関係の初期分化説」とは，関係開始からきわめて初期の時点である程度の関係性が方向づけられ，その先の関係が親密になるか否かが予測できるという説である。初期分化に至るまでの期間は，関係開始から 4 ヶ月 (Berg & McQuinn, 1986)，3 週間 (Hays, 1985)，1 ヶ月（中村雅彦, 1994)，2 週間（山中, 1994)，3 ヶ月（石田, 2003）と一貫しておらず，中には中学一年生の入学直後である初回調査時において，人間関係が既にかなり分化していたという報告もある（大橋ら, 1982)。

この「段階的分化説」と「初期分化説」は，どちらか一方が妥当というわけでなく，状況や関係性によりどち

らを取るかが異なると考えられている。だが，初対面の人物に対する第一印象は，その人物に対する反応に強い影響を及ぼすことが知られており（Asch, 1946），特にその後の関係において相手と相互作用を行なうかどうかを決定することが示されている（Jones& Goethals, 1972）。相互作用は相手との関係の更なる展開を規定すると考えられることから，関係初期に形成される第一印象の重要性は否定できない。さらに，悪印象は好印象よりも持続的であり，覆しにくいものであるという吉川（1989）の知見からは，NIA が PIA に比べて早い段階で安定している可能性も示唆される。こうしたことから，少なくとも NIA については，関係開始からごく初期の段階で決定するとする「関係の初期分化」から説明可能であると推測することができる。関係開始からの対人感情の変遷と安定に要する時間については，現実の対人関係についての縦断的調査から具体的に示されるであろう。

対人感情の形成過程モデル

ところで，態度の下位成分である「感情」と「認知」成分には，単に相違やそれに伴う弁別の必要性が主張されるだけでなく，両者の形成される順序や反応速度の違いが指摘されている。Zaionc（1980）は，単純接触効果（mere exposure effect : Zajonc, 1968）の結果をもとに，認知的反応に比べて感情的反応の反応速度が速いことや，後から認知的弁別はできなくても感情的な弁別はできることから，感情の先行性仮説（affective primacy hypothesis）を提案している。この仮説は，プライミング課題を用いた Murphy & Zajonc（1993）や，「感情」と「行動」の間に「認知」が媒介されることを示した Wilson, Dunn, Bybee, Hyman, & Rotondo（1984）により支持されている。Wilson らは，被験者が理由分析という認知的活性化をしないときは感情的態度（affectively-based attitude）が行動を規定するが，理由分析を行うことで感情的態度が認知的

Table 1　さまざまな二重処理モデル

研究	各処理の名称	内容
Wilson, Dunn, Bybee Hyman, & Rotondo（1984）	感情的態度（affectively-based attitude）	理由分析を行う前の態度。行動との相関は高い。
	認知的態度（cognitively-based attitude）	理由分析を行った後の態度。行動との相関は感情的態度に比べると低い。（感情的態度を認知的態度が修正している）
中村雅彦（1987） 対人好悪の形成過程	情動経路	相互作用の強化的性質により対人感情を決定。 欲求充足や価値実現→快適→好意形成 欲求充足や価値実現の阻害→不快→嫌悪形成
	認知経路	相互作用を経て得た情報から相手を評価し，対人感情を決定。
Sloman（1996） 対人的印象の形成過程	連合システム（associative system）	相手についての情報を手がかりに，そのイメージやステレオタイプなどにより反射的に印象を形成する過程。 （相手からの評価・外見的魅力・相手の行動観察）
	法則準拠システム（rule-based system）	相手との相互作用を通して積み重ねられた情報により，論理的・段階的に印象を形成する過程。
Ginger-Sorolla（1999） 二種類の態度	直感的な態度（immediate attitude）	衝動的に形成され，親しみやすさの知覚など，意識的な統制が不可能な態度形成過程。
	熟慮の上での態度（deliberative attitude）	「直感的な態度」に遅れて生じ，直感的な態度を修正可能。自分の偏見の意識や，偏見を統制しようとする動機づけなどの意識的活動と関係。
Baron & Byrne（2000） 他者の印象の形成		(1) 出会ったばかりは相手の具体的な行動により印象が構成される。
		(2) 関係が進展するにつれて相互作用による内的要因が影響する。
Krull（1993） 2段階の帰属（Two-step process of attribution）		(1) 内的属性への帰属（迅速かつ自発的）
		(2) その人物が置かれている状況も考慮して帰属（意識的な注意や努力が必要）

に修正された認知的態度（cognitively-based attitude）となるため，実際の行動との相関が低くなったと説明している。

この感情の先行性仮説（Zaionc, 1980）が正しければ，態度には感情的に形成されるものと，それより遅れて認知的処理を経て形成されるものがあると考えられるが，このとき態度の「感情」成分と「認知」成分の間に矛盾が生じる可能性もある（Zanna & Rempel, 1988）。Wilson, et. al.（1984）によると，そうした矛盾した態度は，後から形成される認知的成分により修正されていると考えられている。近年，社会的認知研究の中に，特定の刺激人物に遭遇した場合の相手についての情報処理過程をモデル化しようとする試みがなされている（詳細は山本，1998 を参照）が，このような感情と認知の処理スピードの違いを説明するものとして，二重処理モデル（dual processing model）が提案されている。Table 1 は，対人感情の周辺領域におけるさまざまな二重処理モデルをまとめたものである。それぞれのモデルは，個々の処理過程の名称は異なるが，いずれも表の上段が衝動的過程，下段が熟慮的過程と見なすことができる。すなわち，対人感情は相手により喚起された快感情や不快感情により衝動的に形成され，その後の相互作用等を経て修正がなされ，最終的に形成されると考えられる。衝動的過程と熟慮的過程の処理スピードがどの程度違うのか具体的な知見は無いが，「相互作用」「論理的」そして「関係が進展するにつれて」といった表現より，いくらかの時間的幅が想定されていると推測される。

対人感情の形成過程を整理するにあたり，本論ではこの二重処理モデルの立場をとる。先行研究で挙げられてきた対人感情の規定因を二重処理モデルにあてはめると，Figure 2 のようになると考えられる。まず，相手の外見的特性や行動の観察（相手側の要因）や，表面的情報や空間的近接性（物理的要因）などにより喚起された情動が初期の対人感情を決定する経路を (a) 衝動的処理過程とする。そして，相互作用（相互要因）とそれに伴う認知的処理の結果，対人感情が修正される経路を (b) 熟慮的処理過程とする。熟慮的処理には，個人の性格特性やスキルなどの個人の要因（自己要因）もかかわると考えられる。熟慮的処理は衝動的処理に時間的に遅れて生じるが，関係初期はしばらくの間さまざまな認知的処理により衝動的に決定された対人感情を修正し，やがて対人感情が安定すると考える。本論では，こうして相互作用や認知的処理により対人感情が修正された結果，ある程度安定することを対人感情の「形成」と見なす。

NIA 研究の課題

本論では，様々な対人関係研究の視点から対人感情研究を整理し，その位置づけの明確化を試みた。その中でまず，対象を否定的対人感情（NIA）に特化した研究の必要性が挙げられた。NIA に焦点をあてた研究の少なさは述べたとおりであるが，NIA の形成過程と影響要因を明らかにすることは，NIA 対象者ともうまく付き合ってゆかねばならない状況において対人的ストレス軽減への示唆を与えることになると考えられる。長田（1984）が対人関係研究の意義のひとつとして「個人にとって好ましくない対人的環境を避け，より良い対人的環境を形成していくための実際的な知見を提供すること」と挙げているように，対人関係の否定的側面に注目した研究には，我々が快適な対人関係を営むために有用な知見の提案が期待される。また，本論では対人感情を「ネガティブ－ポジティブ」という対称的な概念として扱うことに疑問を呈したが，両者の非対称性が確認されたな

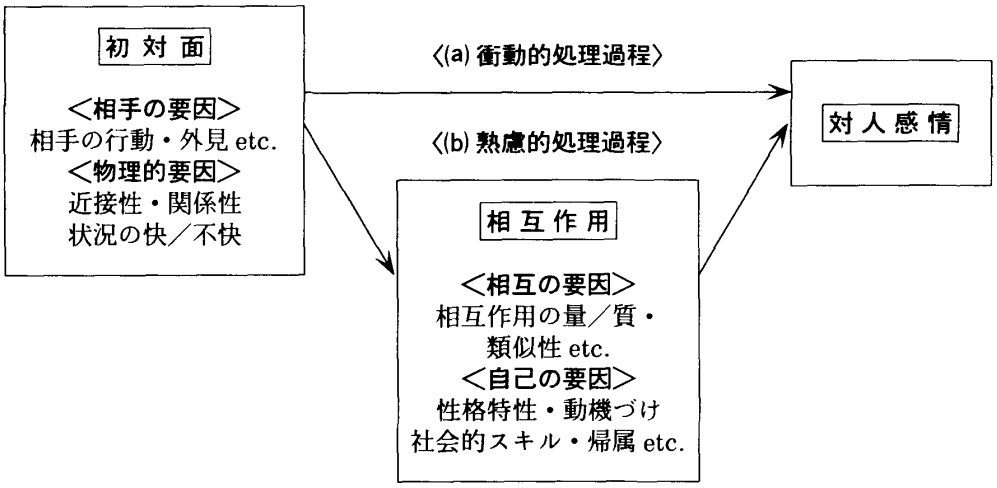


Figure 2　二重処理モデルにもとづいた対人感情形成の処理過程モデル

らば，NIA は PIA の裏側でなく，独自の対人感情カテゴリーということになり，対人感情の否定的側面に特に注目した研究の必要性をさらに支持することになろう。先行研究で得られてきた知見の多くは，親密化や好意の形成といった対人関係の肯定的側面に注目してきたものであるため，NIA と PIA の非対象性が明らかとなったならば，PIAについて得られた知見を NIA についても適用する際には慎重な検討が必要となろう。その他，多くの先行研究が実験室状況で得られたものであったことから，それらと実際の対人関係から得られた知見との比較の余地もあると考えられる。

NIA の構造を整理することも重要な課題である。Lasarus (1999) の指摘にあるように，対人感情を「ネガティブ－ポジティブ」というように過度に単純化して扱うことは，感情の多様性を見落とすことに繋がる危険性がある。NIA はそれを代表する「嫌悪」だけでなく，「軽蔑」や「恐れ」など，多様な性質の対人感情を含んでおり，そうした対人感情の性質により形成過程，影響要因，さらに他の変数に及ぼす影響などが異なると考えられる。こうしたことから，代表的な否定的対人感情を抽出し，それぞれについてその形成過程や影響要因，その機能などを明らかにすることが期待される。

こうした NIA の PIA との対称性の検討と，その下位分類のためには，まず，現実場面において経験される NIA と PIA についてそれぞれ個別に分類を試み，性質を記述する研究が必要であろう。そのために，NIA または PIA といった大まかな分類で扱われてきた対人感情をさらに分類した測定尺度の開発も期待される。なお，対人感情の下位分類を示すことにより，これまで「ネガティブ－ポジティブ」という一次元上で単純に扱われてきた対人感情研究の可能性も大きく広がることが期待される。たとえば NIA と PIA を弁別することで，主に PIA を中心とした一般的対人感情について得られた対人感情の規定因がNIA研究においても同様に作用しているのかを示す手がかりとなろう。また，NIA と PIA についてそれぞれ得られた下位分類の対比により，両者の対称性についての知見も提供されるであろう。

さらに，様々な対人感情の規定因相互の関係を考慮した NIA 形成過程の検証も今後の研究課題である。NIA の規定因としては，古くは NIA 対象者の性格特性・身体的特徴といった対象者自身の要因や，対象者と評価者の両者が置かれた状況や環境といった物理的要因への注目が盛んであった。また近年では，評価者側に注目して，NIA を形成しやすい個人の特性への関心や，相互作用の影響を指摘する声が高まってきている。

そこで本論では，印象形成の二重処理モデルをもとに，先行研究で示されてきた対人感情の規定因を組み込んだ対人感情形成の処理過程モデルを提案した（Figure 2）。NIA の下位尺度によりそれぞれの対人感情の形成過程や影響要因が異なる可能性があることから，NIA の下位尺度ごとにこのモデルの検討を行い，比較することで，NIA の性質や形成・修正過程についての詳細な知見が得られるであろう。それにはまず，(a) の衝動的処理過程により形成された対人感情が，(b) の熟慮的処理過程により修正されるのに要する期間（修正期間）を特定する必要がある。その上で修正期間において強い影響力を持つ要因を明らかにすることにより，対人感情の多様性に対応したその形成過程が示されると考えられる。

文　　献

Allport, G. W. 1954 The historical background of modern social psychology in G. Lindzey (Ed.) *Handbook of social psychology.* Vol. 1 Cambridge, Mass.: Addison-Wesley. Pp. 3-56.

青木みのり　1994　青年期における対人感情と他者概念との関連 社会心理学研究, **10**, 190-195.

Aron, A., Dutton, D. G., Aron, R. N., & Iverson, A. 1989 Experiences of falling in love. *Journal of Social and Personal Relationships,* **6**, 243-257.

Aronson, E., Willerman, B., & Floyd, J. 1966 The effect of a pratfall on increasing interpersonal attractiveness. *Psychonomic Science,* **4**, 227-228.

Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* **41**, 258-290.

Altman, I. & Taylor, D. T. 1973 *Social penetration: the development of interpersonal relationships.* New York: Holt, Rinehart and Winston

Averill, J. R. 1983 Studies on anger and aggression: Implications for theories of emotion. *American Psychologist,* **38**, 1145-1160.

Bagozzi, R. P. & Burnkrant, R. E. 1979 Attitude organization and the attitude-behavior relationship. *Journal of Personality and Social Psychology,* **37**, 913-929.

Baron, R. A., & Byrne, D. 1984 *Social psychology* (4th ed.). Allyn & Bacon, Pp. 546-554.

Baron. R. A., & Byrne, D. 2000 Social perception: Understanding others. In A. Baron , & D. Byrne, *Social Psychology*. Allyn and Bacon. Pp. 36-77.

Berg, G. H. 1984 Development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology,* **46**, 346-356.

Berg, J. H., & McQuinn, R. D. 1986 Attraction and exchange in continuing and noncontinuing dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* **50**, 942-952.

Berscheid, E. 1985 Interpersonal Attraction, In G. Lindzey and Elaine Aronson, eds., *Handbook of Social Psychology,* (3rd ed.), Vol. 2, New York: Random House, Pp.413-484.

Berscheid, E., & Walster, E. 1974 Physical attractiveness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 7, New York :Academic Press. Pp. 157-215.

Bigelow, B. J., & La Gaipa, J. J. 1980 The development of friendship value and choice. In H. C. Foot, A. J. Chapman, & J. R. Smith (Eds.), *Friendship and social relations in children,* John Wiley. Pp.15-44.

Bornstein, R. F., & D'Agostino, P. R. 1992 Stimulus recognition and the mere exposure eddect. *Journal of Personality and Social Psychology,* **63**, 545-552.

Breckler, S. J., & Wiggins, E. C. 1989 Affect versus evaluation in the structure of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology,* **25**, 253-271.

Breckler, S. J., & Wiggins, E. C. 1991 Cognitive responses in perception: Affective and evaluative determinants. *Journal of Experimental Social Psychology,* **27**, 180-200.

Brickman, P., Redfield, J., Harrison, A. A., & Crandall, R. 1972 Drive and Predisposition as Factors in the Attitudinal Effects of Mere Exposure. *Journal of Experimental Social Psychology,* **8**, 31-44.

Berger, C. R. 1993 Goals, plans and mutual understanding in personal relationships. In S. W. Duck (Ed.) *Understanding relationship processes 1: Individuals in relationships.* Newbury Park: Sage. Pp.30-59.

Byrne, J. M., Baskett,G. T., & Hodges, L. 1971 Behavioral indicators in interpersonal attraction. *Journal of Applied Social Psychology,* **1**, 137-149.

Curtis, R.C. & Miller, K., 1986 Believing another likes or dislikes you: Behaviors making the beliefs come true. *Journal of Personality and Social Psychology,* **51**, 283-290.

Duck, S. 1977 *Theory and practice in interpersonal attraction.* Academic Press.

Fazio, R. H. 1989 On the power and functionality of attitudes : The role of attitude accessibility. In A. R. Pratkanis, S. J. Breckler & A. G. Greenwald (Eds.), *Attitude structure and function.* Hillsdale, N. J.: Lawrence Erbaum Associates. Pp. 153-179.

Festinger, L., Schachter, S. & Back, K. 1950 *Social Pressures in Informal Groups: A Study of a Housing Community.* Stanford University Press.

Fiedler, F. E., Warrington, W. G., & Blaisdel, F. J. 1952 Unconscious attitudes as correlates of sociometric choice in a social group. *Journal of Abnormal & Social Psychology,* **47**, 790-796.

Foa, U. G. 1961 Convergences in the analysis of the structure of interpersonal behavior. *Psychological Review,* **68**, 341-353.

Forgas, J. P. 1991 ,Affect and person perception. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments.* Pergamon Press. Pp.263-290.

Forgas, J. P. & Bower, G. H. 1987 Mood effects on personality and social judgements. *Journal of Personality and Social Psychology,* **53**, 53-60.

Freedman, M. B., Leary, T. F., Ossorio, A. G., & Coffey, H. S. 1951 The interpersonal dimension of personality. *Journal of Personality,* **20**, 143-161.

Ginger-Sorolla , R. 1999 Affect in Attitude: Immediate and deliberative Perspectives. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology,* New York: Guilford Press, Pp. 441-461.

Griffit, W. 1966 Environmental effects on interpersonal affective behavior: Ambient effective

temperature and attraction. *Journal of Personality and Social Psychology,* **15**, 240-244.

Hays, R. B. 1985 A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology,* **48**, 909-924.

林　文俊　1978　対人認知構造の基本的次元についての一考察　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**25**, 233-247.

林　文俊　1996　対人認知研究の意義　長田雅喜（編）対人関係の社会心理学　福村出版　Pp. 48-58.

Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations.* New York.: Jhon Wiley.（大橋正夫（訳）1978　対人関係の心理学　誠心書房）

廣岡秀一　1989　対人認知　大坊郁夫・安藤清志・池田謙一（編）社会心理学パースペクティブ1　個人から他者へ　誠心書房　Pp. 19-40.

Huston, T. L. 1974 *Foundations of interpersonal attraction.* Academic Press.

Huston, T. L. & Levinger, G. 1978 Interpersonal attraction and relationships. *Annual Review of Psychology,* **29**, 115-156.

日向野智子・堀毛一也・小口孝司　1999　青年期の対人関係における苦手意識　昭和女子大学生活心理研究所紀要，43-62.

日向野智子・小口孝司　2002　対人苦手意識の実態と生起過程　心理学研究，**73**, 157-165.

池上知子　1991　対人好悪の感情が情報の体制化に及ぼす影響　愛知教育大学研究報告（教育科学編），**40**, 155-169.

Ikegami, T. 1993 Negative affect and social cognition: The differential effects of self-referent vs. other-referent emotional priming on impression formation. Japanese *Journal of Experimental Social Psychology,* **32**, 214-222.

石田靖彦　2003　友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響　―大学新入生の縦断研究―　対人社会心理学研究，**3**, 15-22.

岩下豊彦　1969　対人好悪感情の生起およびその認知の規制に関する基礎的研究　早稲田大学博士論文

Jones, E. E., & Goethals, G. R. 1972 Order effects in impression formation. In E.E. Jones et al. (Eds.) *Attribution: Perceiving the causes of behavior.* Morristown NJ: General Learning Press. Pp. 27-46.

梶田叡一　1967　他者についての概念化と対人感情　心理学研究，**38**, 284-289.

梶田叡一　1988　自己意識の心理学　東京大学出版会

加藤　司　2003　失恋状況における対人ストレスコーピングと失恋からの立ち直り　社会心理学会第44回大会発表論文集，602-603.

金山富貴子　2003　社会的関係における嫌悪対象者への対処行動　日本心理学会第67回大会発表論文集，191.

Krech, D, Crutchfield, R & Ballachey, E. 1962 *Individual in society.* New York: McGraw-Hill

Krull, D. S. 1993 Does the grist change the mill? The effect of the perceiver's inferential goal on the process on social inference, *Personality and Social Psychology,* **19**, 340-348.

Lazarus, R. S. 1999 Reason and Our Emotions: A Hard Sell. 日本心理学会第63回大会　特別講演

Levinger, G. 1974 A three-level approach to attraction: Toward an understanding of pair relatedness. In T. L. Huston (Ed.), *Foundations of interpersonal attraction.* New York: Academic Press. Pp. 99-120.

増田匡裕　2001　対人関係の「修復」の研究は有用か　対人社会心理学研究，**1**, 25-36.

McDougall, W. 1908 *An introduction to social psychology.* Methuen.

McGuire, W. J. 1969 The nature of attitudes and attitude change. In Linzey, G. & Aronson, E. (Eds.), *Handbook of Social Psychology,* Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Pp. 136-314.

Murphy, S. T., & Zajonc, R. B. 1993 Affect, cognition, and awareness: Affective priming with optimal and suboptimal stimulus exposures. *Journal of Personality and Social Psychology,* **64**, 723-739.

中村陽吉　1983　対人場面の心理　東京大学出版会

中村和彦　1996　態度の構造　長田雅喜（編）対人関係の社会心理学　福村出版　Pp. 81-91.

中村雅彦　1985　対人魅力の規定因としての自己開示　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学），**32**, 201-213.

中村雅彦　1987　態度形成と対人魅力　―対人関係の発展過程に関する理論化の試み―　愛媛大学教養部紀要，**20**, 23-45.

中村雅彦　1991　大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究　実験社会心理学研究，

31, 132-146.

中村雅彦　1994　対人魅力の形成に関する研究　──好意的感情と関係性の規定条件に関する検討──　名古屋大学大学院教育学研究科博士学位論文（未公刊）

中村雅彦　1996　対人関係と魅力　大坊郁夫・奥田秀宇（編）　対人行動学研究シリーズ5　親密な対人関係の科学　誠信書房　Pp. 23-57.

奥田秀宇　1993　態度の重要性と仮想類似性　──対人魅力に及ぼす効果──　実験社会心理学研究，**33**, 11-20.

奥田秀宇　2000　対人魅力による重要性効果　──被験者間および被験者内要因による検討──　実験社会心理学研究，**39**, 114-120.

大橋正夫・平林　進・小川　浩・鹿内啓子・林　文俊・吉田俊和・津村俊充　1978　女史大学生における対人認知と対人関係に関する追跡的研究　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**25**, 57-78.

大橋正夫・鹿内啓子・吉田俊和・林　文俊・津村俊充・平林　進・坂西友秀・廣岡秀一・中村雅彦　1982　中学生の対人関係に関する追跡的研究　──センチメント関係と学級集団構造　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**29**, 1-100.

大迫弘江・高橋　超　1994　対人葛藤事態における対人感情および葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響　実験社会心理学研究，**34**, 44-57.

大坪靖直・吉田寿夫　1990　印象形成における手がかりの優位性に関する研究　実験社会心理学研究，**30**, 25-33.

長田雅喜　1984　対人魅力（大橋正夫，古畑和孝，鈴木康平，白樫三四郎（編）　現代社会心理学　──個人と集団・社会──）　朝倉書店，Pp. 81-94.

Rosenbaum, M. E. 1986 The repulsion hypothesis: On the nondevelopment of relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* **51**, 1156-1166.

Rosenberg, M. J. & Hovland, C. I. 1960 Cognitive, affective, and behavioral components of attitude. In M. J. Rosenberg, C. I. Hovland, W. J. McGuire, R. P. Abelson, & J. W. Brehm (Eds.), *Attitude organization and change : An analysis of consistency among attitude components.* New Heaven: Yale University Press. Pp. 1-14.

Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology,* **16**, 265-273.

齋藤　勇　1985　対人感情と情緒の人間関係的アプローチ　心理学研究，**56**, 222-228.

齋藤　勇　1986　対人感情と対人行動と情緒との関連　心理学研究，**57**, 242-245.

齋藤　勇　1990　対人感情の心理学　誠信書房.

Schneider, D. J. 1969 Tactical self-presentation after success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology,* **13**, 262-268.

Sloman, S. A. 1996 The empirical case for two systems of reasoning, *Psychological Bulletin,* **119**, 3-22.

高木邦子　2000　対人的動機と社会的相互作用経験が否定的対人感情の修正に及ぼす影響　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，**47**, 205-213.

竹村和久・高木修　1987　援助行動および非援助行動における原因帰属の次元　実験社会心理学研究，**27**, 15-25.

竹村和久・高木修　1990　対人感情が援助行動ならびに非援助行動の原因帰属に及ぼす影響　実験社会心理学研究，**30**, 133-146.

Taylor, S. E. 1991 Asymmetrical Effects of Positive and Negative Events: The Mobilization-Minimization Hypothesis, *Psychological Bulletin,* **110**, 67-85.

飛田　操　1989　目標達成の困難度と対人魅力との関係について　心理学研究　**60**, 69-75.

遠矢幸子　1996　友人関係の特性と展開　大坊郁夫・奥田秀宇（編）　対人行動学研究シリーズ3　親密な対人関係の科学　誠信書房　Pp. 89-116.

Triandes, H. C. 1967 Toward an analysis of the components of interpersonal attitudes. In C. Sherif & M. Sherif (Eds.), *Attitude, ego-involvement and change.* New York : Wiley. Pp. 227-270.

津村俊充・大坊郁夫・林　文俊・今川民雄　1984　対人的オリエンテーションの研究（4）　──対人感情の構造について──　日本心理学会第48回大会発表論文集，664.

浦　光博　1990　対人関係の変化過程の検討　社会心理学研究，**5**, 110-121.

渡辺直登　1999　メンタリングによる人材の育成　人材教育，**7**, 14-19.

渡部玲二郎　1999　対人関係能力と対人欲求の関係，心理学研究，**70**, 154-159.

Watson, D., & Tellegen, A. 1985 Toward a consensual structure of mood. *Psychological Bulletin,* **98**,

219-235.

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measures of Positive and Negative Affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology,* **54**, 1063-1070.

Wilson, T. D., Dunn, D.S., Bybee, J. A., Hyman, D. B., & Rotondo, J. A. 1984 Effects of analyzing reasons on attitude-behavior consistency, *Journal of Personality and Social Psychology,* **47**, 5-16.

八木保樹・新延　明　1989　課題を選択することが対人感情・評価に及ぼす効果，心理学研究，**60**，170-179.

山本真理子　1986　友情の構造　人文学報（東京都立大学人文学部），**183**，77-101.

山本真理子　1998　対人情報処理過程　──印象形成過程における社会的認知　山本真理子・外山みどり（編）　対人行動学研究シリーズ18　社会的認知　Pp.103-128.

山中一英　1994　対人関係の親密化過程における関係性の初期分化減少に関する検討　実験社会心理学研究，**34**，105-115.

吉川肇子　1989　悪印象は残りやすいか　実験社会心理学研究，**29**，45-54.

弓削洋子　1994　対人関係の親密さの変化による対人認知の変容　心理学研究，**65**，355-363.

Zaionc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology, Monograph Supplement,* **9**, 1-27.

Zaionc, R. B. 1980 Feeling and thinking: Preferences need no inferences. *American Psychologist,* **35**, 151-175.

Zanna, M. P., & Rempel, J. K. 1988 Attitudes: A new look at an old concept. In D. Bar-Tal & A. W. Kruglanski (Eds.) *The social psychology of knowledge*, Cambridge, England: Cambridge University Press. Pp. 315-334.

Zevon, M. A. & Tellegen, A. 1982 The structure of mood change: An idiographic/nomothetic analysis, *Journal of Personality and Social Psychology,* **43**, 111-122.

（2004年9月30日　受稿）

ABSTRACT

Aspects of the studies of Negative Interpersonal Affects

Kuniko TAKAGI

The purpose of this paper is to clarify the points that need to be verified in the study of the negative interpersonal affects (NIA).

First, the place of NIA study in social psychology is discussed, and the question about symmetry structure of NIA and PIA (positive interpersonal affects) are pointed out. Next, various prior studies of NIA formation are reviewed, and issues to be examined are pointed out: (1) An examination of symmetry structure of NIA and PIA, (2) a more detailed classification of NIA, (3) an examination of the possibility of using the results gained from laboratory experiments concerning PIA for studies of NIA in the real interpersonal relationships.

Furthemove, the paper proposes a dual processing model of NIA formation. In this model, NIA is formed by emotional processing route, and it is modified by cognitive processing route. Consequently, it becomes necessary to clarify the time required forming the NIA, and the factors affecting each NIA sub scale.

Key words: negative interpersonal affect, symmetry structure, dual processing model, emotional processing route, cognitive processing route